鹿児島大学附属図書館玉里文庫に見る薩摩藩の海外情報収集
—太平天国印書を中心に—

高津　孝

本論文は、鹿児島大学附属図書館玉里文庫に所蔵される幕末期、薩摩藩の収集した海外情報資料を紹介するものである。

一　玉里文庫概要

島津家は、今から約八百年前、惟宗忠久（?～一二二七）が源頼朝より、島津荘の下司職・地頭職に任命され、島津姓を名乗ったことに始まるといわれている。それ以降、九州南部の薩摩・大隅・日向を中心に中世から近世・幕末まで一貫して有力大名としての地位は揺るがなかった。この八百年にも及ぶ大名家に代々伝わった文書類は、日本の中世から近代にかけての歴史を研究する場合、欠かすことの出来ない重要な資料群として、つとに有名である。現在これらの文書は、四ヶ所に分散して所蔵されている。東京の袖が崎島津家（島津本家）のものは、東京大学史料編纂所と鹿児島市磯の尚古集成館に、鹿児島の玉里島津家のものは、鹿児島大学附属図書館と鹿児島県立歴史資料センター黎明館に、それぞれ所蔵されている。鹿児島大学附属図書館に所蔵されている玉里文庫は、昭和二十六年（一九五一）玉里島津家より購入したもので、和書及び漢籍・文書など一万八千九百余冊にのぼる大量の貴重書である。玉里島津家は、薩摩二十八代藩主島津斉彬（一八〇九～一八五八）の弟島津久光（一八一七～一八八七）に始まる。島津斉彬が安政五年（一八五八）に突然亡くなり、藩主は久光の長子忠義が継ぐことになる。そのため久光は「国父」として忠義の後見役となり、幕末から明治にかけて実質的な薩摩藩の代表として重要な政治的立場にあった。島津久光は大変な学問好きであり、歴史学者として『六国史』の後を継ぎ、自ら仁和四年（八八八）から応永一九年（一四一二）にかけての歴史書『通俗国史』二十二巻を著した。また、臣下の重野安繹・小牧昌業に命じ『皇朝世鑑』四十一冊を編纂させ、市来四郎に『旧記秘論』『島津家国事鞅掌史料』等を集録させた。そうした歴史編纂に利用することを考えて、和漢の歴史資料を集中的に収集したらしく、玉里文庫においては、島津家伝来の古文書群のほか、史部は特に充実している。

玉里文庫は、四つに分散した島津家文書のなかで、唯一書籍が中心になったもので、近世薩摩の学術の全体像をうかがうことができる。

二　幕末の動乱

一九世紀、東アジアは激動の時代を迎える。強盛を誇った清朝が一八四〇—四二年のアヘン戦争でイギリスに敗北し、南京条約によって強制的開港を迫られたことは、最も大きな事件であった。その一一年後、一八五三年に米国の使節ペリーが日本の浦賀に寄港し開国を迫り、徳川幕府は一八五四年に日米和親

条約、一八五八年に日米修好通商条約を締結する。その結果、日本国内においては、開国派と攘夷派の激しい対立が生じ、幕末の動乱期が始まる[1]。

幕府内部においては、京都の朝廷と連携し公武合体路線をとる派閥（一橋派）と譜代大名の勢力を背景に幕閣独裁体制を強化しようとする派閥（南紀派）の対立があり、その後、後者の勢力を背景に、井伊直弼の大老就任、紀州家出身の第一四代将軍（家茂）擁立が行われ、対立はより激しくなった。さらに、これに、開国に踏み出さざるをえなかった幕府と、雄藩を中心とした開国に反対する攘夷派の対立が重なる。開国を選択した幕府の政策に反対する一橋派の有力大名らは謹慎を命じられ、反対派の武士たちは逮捕され、刑死させられた（安政の大獄）。幕府の厳しい措置に激怒した水戸藩の武士たちは、大老暗殺事件を引き起こす。これに動揺した幕府は、朝廷との融和を図り、佐幕尊王の路線として公武合体運動を進め、孝明天皇の妹和宮を将軍家茂夫人として江戸に迎える。

薩摩藩は雄藩の一角として公武合体の立場をとり、朝廷と結んで、幕政の改革を要求した。朝廷のある京都では尊攘派が勢力を占め、朝廷を動かし、攘夷の決行を幕府に迫り、幕府は文久三年（一八六三）五月一〇日を攘夷決行とし、諸藩にその対応を命じた。長州藩はそれに応じて、外国船に砲撃を加えるが、イギリス、アメリカ、フランス、オランダ四か国艦隊の反撃で長州藩は敗退する（下関戦争）。一方、薩摩・会津の両藩は朝廷内の公武合体派の公家らと連絡をとり、朝廷内外の尊攘派を一掃する。長州藩は兵を率いて上京するが、薩摩・会津の両藩兵に撃退される。幕府は長州の罪を問うため、長州征伐の軍を出し、長州藩は屈服する。薩摩藩も生麦事件の報復として文久三年（一八六三）七月イギリス軍艦の砲火を浴び、近代武器の威力を目にする（薩英戦争）。

薩摩藩や長州藩は下関戦争や薩英戦争によって列強の実力を知り、イギリスに接近する。長州藩では、高杉晋作が兵をあげ藩の実権を奪取し、藩論を尊攘から討幕に転回させた。幕府は一八六六年第二次長州征伐を宣言するが、薩摩藩は長州藩と軍事同盟（薩長同盟）の密約を結ぶ。長州藩の攻勢で、幕府軍は至る所で負け、将軍家茂の急死により戦闘中止となる。幕府と対立する薩摩、長州は、連合して武力討幕を決意する。幕府は討幕派の機先を制して一八六七年（慶応三）一〇月一四日に大政奉還の上表を朝廷に提出し、さらに慶喜の将軍職辞表の提出を経て、一二月九日王政復古が宣せられ、幕府は廃絶し、政権は朝廷に移った。

三　薩摩藩の海外情報収集

以上のような、東アジアの政治的変化の動向に日本で最も早く接したのは、薩摩藩であった。琉球は表面的には独立国の体面を保ち清朝に対して朝貢貿易を行っていたが、実質的には薩摩藩の支配下に置かれていた。その琉球に対して一八四四年にはフランス船が来航し、一八四七年には薩摩藩は英仏に対して

1　以下の記述は、津田秀夫「幕末」（『日本大百科全書』小学館、一九八四年）に基づく。

琉球を開港している。こうした東アジア情勢の大きな変化に対応するため、薩摩藩は組織的な情報収集を行ったようで、玉里文庫にはそうした海外情報の収集の一端を示す資料が保存されているのである。

玉里文庫の蔵書は基本的に玉里島津家の蔵書で、島津久光の収集した蔵書が根幹をなすが、歴代藩主の蔵書も含まれている。例えば、玉里文庫には、久光の兄である薩摩二八代藩主島津斉彬の蔵書印「春藪文庫」が押された書物が八一点含まれている[2]。玉里文庫の総点数二六七〇余点（約一八九〇〇冊）に比すれば僅かであるが、歴代藩主の蔵書が重層的に集積した結果であることを明確に示している。海外情報資料の収集は基本的に島津斉彬の藩主時代（一八五一―五八）と斉彬没後、薩摩藩の実質的最高権力者であった久光の時代（一八五八―六八）に集中的に行われ、そのかなりの部分が玉里文庫に伝来していると考えられる。

島津家資料の中で、図書を中心とする玉里文庫を分析することで、幕末期薩摩藩の海外情報収集の一端を知ることができる。同時代の海外情報資料は、①地図、②地誌・海外事情、③漂流民資料、④東アジアの戦争・戦乱資料に分けられる。以下、玉里文庫目録作成委員会編『玉里文庫目録』（一九六六年、鹿児島大学附属図書館）に基づき記述を行う。

①　地図としては、世界図として『地球一覧図』（天明三年刊）（天の部九一番八一七）、『喎蘭新訳地球全図』（寛政八年刊）（天の部九一番八二七）、『海陸封疆図』（嘉永七年刊、原著一八四二年ロンドン刊）（天の部一八二番一二六九）、『地学正宗図』（嘉永三年刊、『地学正宗』附図、両半球図、地球全図以下ヨーロッパ州および各国地図二〇図）（天の部一一八番一〇一二）が所蔵され、蝦夷地の地図として『東西蝦夷山川地理取調図』（万延元年刊）（天の部一三番三九二）、『エトロフ島クナシリ島之図』（嘉永七年写）（天の部八四番六九二）、『蝦夷之図』（嘉永七年写）（天の部八四番六九三）、『蝦夷闔境輿地全図』（嘉永六年刊）（天の部九一番八一九）、『蝦夷絵図』（写本）（天の部九一番八二二）、『蝦夷松前之図』（写本）（天の部九一番八二九）が所蔵され、中国の地図として『唐土歴代州郡沿革地図』（天保六年刊）（天の部一五番四二二）が所蔵されている。

②　地誌・海外事情としては、『増補華夷通商考』（宝永五年刊、日本人の手になる最初の海外地誌、初版元禄八年刊、中華十五省、外国、外夷、外夷増附録）（天の部四五番五三六）、『和蘭風説』（写本）（「嘉永二年七月入津紅毛別風説書和蘭人別風説書」を翌三年六月に和解したもの）（天の部八四番六九九）、『靖海全書合衆国考』（写本）（『増訳訂正采覧異言』『坤輿図識』『洋外紀略』『坤輿図識補』等から合衆国に関連する事項等を収録）（天の部八五番七二〇）、『地学正宗』（嘉

2　八一点のうち、海外情報関連のものを示す。語学『唐音』『瑪列乙斯語撰』『蘭語以呂波引』。海外事情・漂流記録『阿蘭陀船乗組人数名歳』『ボナパルト戦争』『西洋雑記』『宇婆良加波那』『漂海紀聞』、洋学・兵学『西洋算書』『遠鏡製造』『寄崎図説続篇』『新製エレクトロポレ説』『ショメール和解抜書』『西洋草木韻箋』『西洋名物韻箋』『和蘭本草名録』『硝子製造』『スヒッツワーカ乃説』『砲術備要』。

永三年~四年刊、原著は和蘭ハールレム府学教諭ピイプリンセン著（一八一七年刊）、巻一総括、巻二~巻五ヨーロッパ、巻六アジア、巻七アフリカより成る）（天の部一一八番一〇一二）、『坤輿図識』（弘化二年刊、ニウウェンホイス、ブロイニング等の蘭書に拠った世界地誌、五大州五巻）（天の部一一八番一〇一三）、『坤輿図識補』（弘化四年刊、『坤輿図識』の補で、巻一総説、巻二、三アジア、アメリカ、ヨーロッパ、第四人物略伝）（天の部一一八番一〇一四）『海国図志』（道光二十七年刊）（天の部一五五番一〇八四）（嘉永七年刊）（天の部一一番三五八、八五番七三六、七三七A、七九二A）（安政二年刊）（天の部八五番七三七B、八八番七九二B）が所蔵され、蝦夷地のものとして『蝦夷志』（享保五年序写本）（天の部一一番三六三）、『北蝦夷新志』（慶応三年刊）（天の部一四番四一一）、『蝦夷人行状記』（天の部八四番六九六）、『官準北蝦夷図説』（安政二年刊）（天の部八五番七二二）、『夷酋列像附録』（寛政一〇年写本）（天の部九一番八四四）が所蔵されている。

③　漂流民資料としては、『伊勢漂民風説』（寛政五年編写本）（漂民風説書抜萃、従松前之来書要文抜萃、信牌、漂民御覧之記（伊勢漂民幸太夫、磯吉、小市のロシア漂流譚、天明二年~寛政四年））（天の部八四番七〇一）、『漂流人申口覚書』（写本）（文化一二年八月遭難、広東省恵州へ誕着、翌一三年閏八月長崎帰着の薩藩士新納次郎九郎、伊集院清廉、江川金太郎、有川与左衛門等の申立てを在館唐人に照会したもの）（天の部一八一番一二〇〇）、『様子書』（写本）（文化一二年薩藩士古渡七郎右衛門、染川伊兵衛、税所長左衛門等が唐国へ漂流、翌一三年帰国唐国の様子について記したもの）（天の部一八二番一二五九）、『口書』（写本）（同上）（天の部一八二番一二六〇）、『漂海紀聞』（写本）（文化九~一三年、千島カムチャッカへ漂流した薩摩川内船間島永寿丸の喜三左衛門、佐助、角次の見聞記）（天の部一八二番一二六二）、『蕃譚』（写本）（越中富山の能登屋兵右衛門船、長者丸漂流記（天保九~一四年）サイドウイッチ島、オアフ、カムチャツカ等について記す）（天の部一八二番一二六六）、『宇婆良加波那』（写本）（文政一一年一〇月遭難の八丈島仁寿丸船頭儀兵衛らの翌年正月シャム、同年一一月浙江を経て、一二月長崎に帰着した漂流見聞記）（天の部八一番六三八）、『海外異話』（写本）（伊予国松山和気郡奥居島村の船子玄之助のカリフォルニア、マニラ、広東等の漂流記（天保一二~弘化二年）（天の部八四番六九五）がある。

④　東アジアの戦争・戦乱資料として、アヘン戦争に関する中国書二点、『夷匪犯境見聞録』写本六巻（天の部八九番八〇六）、『夷匪犯境録』写本二冊（天の部八九番八〇七）、日本人編纂物三点、佐藤信淵著『水陸戦法録』写本七巻二冊（アヘン戦争記録に評言を加えたもの、弘化四年自序）（天の部一八二番一二六四）、佐久間象山著『佐久間修理書取』写本一巻一冊、（アヘン戦争について信州松代真田侯儒臣佐久間の海防献策）（天の部八四番七〇〇）、塩谷宕陰編『阿芙蓉彙聞』写本七巻七冊（原始、禁烟、交兵上中下、徴毖、善後の七巻より成るアヘン戦争関係書集、弘化四年序）（天の部

八九番七九八）が所蔵される。また、特に注目すべきものとして、太平天国資料五部が所蔵されている。一つは清朝人の著述二部で、清・姚憲之撰『粤匪南北滋擾紀略』一巻一冊、咸豊五年刊（天の部九一番八三五）、清・謝介鶴撰『金陵癸甲摭談』一巻二冊、咸豊六年刊（天の部九一番八三三）。今一つが、太平天国による印刷物三点であり、東アジアで所蔵が確認されたのは初めてであろう。『太平詔書』『太平軍目』『頒行詔書』太平天国壬子二年刊（太平天国治下に発行された詔書一四書中の三書）（天の部九一番八三六）である。

四　玉里文庫の太平天国資料

玉里文庫の海外情報資料中で特に珍しいものとして、太平天国関連の図書がある。以下、太平天国関連図書五点を紹介する。

なお、原刻本では、太平天国の「国」は全てくにがまえに「王」であるが、本論考では一般的な「国」字を使用する。

『太平詔書』一巻（玉里文庫・天の部九一番八三六／一）

封面半葉（図1）、版心「詔書總目」一葉（図2・3）、版心「太平詔書」十四葉。

封面：黄紙。上欄刻有横書「太平天国壬子二年新刻」。中央刻有「太平詔書」。龍鳳紋。

書目：「旨准頒行詔書總目」：十四部。

書目至第一葉：朱文正方印「旨准」。

王慶成『太平天国的文献和歴史　海外新文献刊布和文献史事

図1　『太平詔書』封面

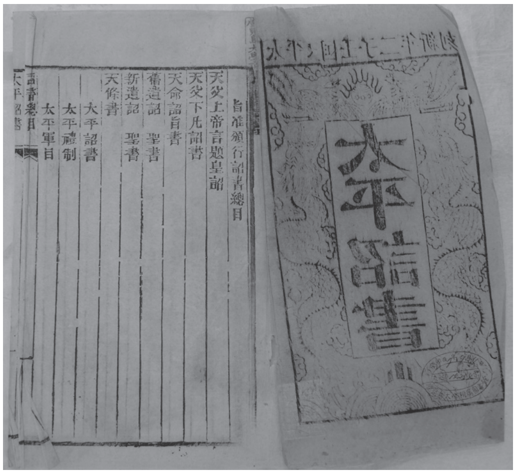
図2　『太平詔書』旨准頒行詔書總目

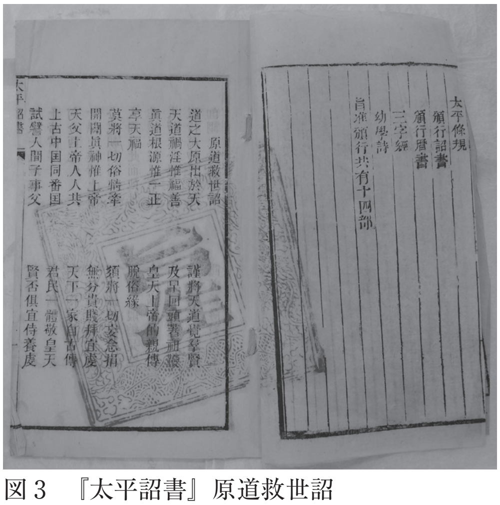
図3　『太平詔書』原道救世詔

研究』（社会科学文献出版社、一九九三年）p106-114「太平天国印書原刻本封面紙色等情況概覧表」のp107「太平詔書(1)―(9)」の「太平詔書(5)」（美国国会）に相当。

《太平天国大詞典》中國社會科學出版社，一九九五年，p843「太平詔書　書名。太平天国印書。洪秀全撰，系《原道救世歌》，《原道醒世訓》，《原道覺世訓》的匯編。」

『頒行詔書』一巻（玉里文庫・天の部九一番八三六／二）

封面半葉（図4）、版心「詔書總目」一葉（図5・6）、版心「頒行詔書」十葉。

封面：黄紙。上欄刻有横書「太平天国壬子二年新刻」。中央刻有「太平天国/禾乃師贖病主/左輔正軍師東王/楊/右弼又正軍師西王/蕭/奏/准頒行詔書」。龍鳳紋。

書目：「旨准頒行詔書總目」：十四部。

書目至第一葉：朱文正方印「旨准」。

王慶成『太平天国的文献和歴史　海外新文献刊布和文献史事研究』p106-114「太平天国印書原刻本封面紙色等情況概覧表」のp109「頒行詔書(1)―(8)」の「頒行詔書(3)」（英図）に相当。

《太平天国大詞典》p959-960「頒行詔書　書名。太平天国官方印書。系東王楊秀清，西王蕭朝貴於壬子二年聯名頒布的《奉

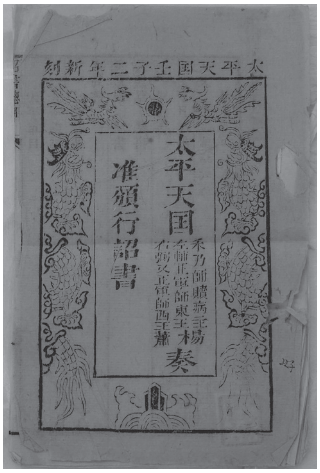

図4　『頒行詔書』封面

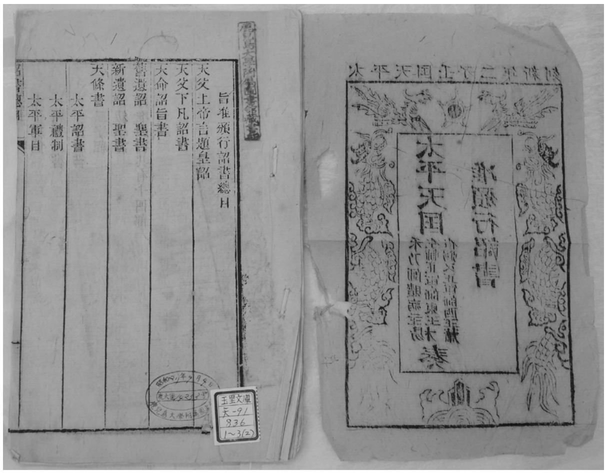

図5　『頒行詔書』旨准頒行詔書總目

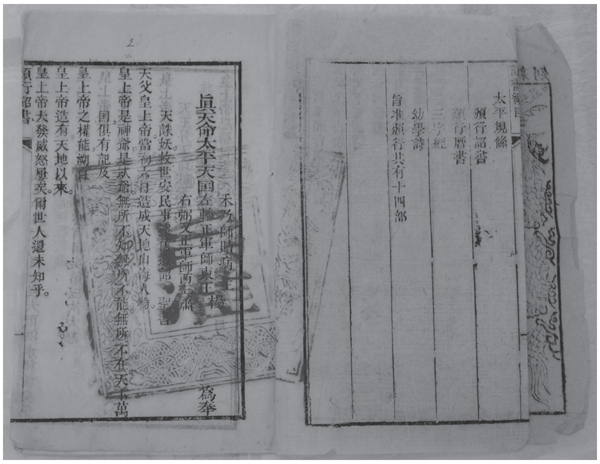

図6　『頒行詔書』奉天誅妖救世安民諭

天討胡檄布四方諭》，《奉天誅妖救世安民諭》，《諭救一切天生天養中國人民諭》三文的匯刻。」

『太平軍目』一巻（玉里文庫・天の部九一番八三六／三）

封面欠、版心「詔書總目」一葉（図7）、版心「太平軍目」三十四葉（図8）。

書目：「旨准頒行詔書總目」：十三部。

書目至第一葉：朱文正方印「旨准」。

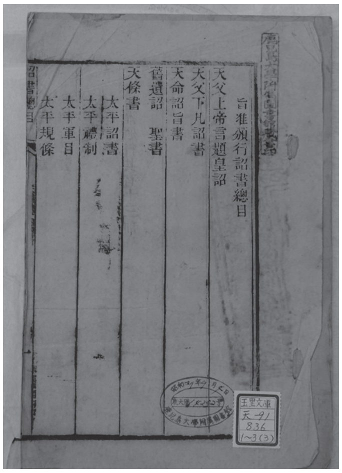

図7　『太平軍目』旨准頒行詔書總目

王慶成『太平天国的文献和歴史　海外新文献刊布和文献史事研究』p106-114「太平天国印書原刻本封面紙色等情況概覧表」のp106「太平軍目(1)—(5)」の「太平軍目(4)」（牛津）に相当。

《太平天国大詞典》p843「太平軍目　書名。太平天国印書，専載太平軍的組織制度。其制採自《周禮》「五人為伍，五伍為兩，四兩為卒，五卒為旅，五旅為師，五師為軍。」設軍，師，旅帥，卒長，兩司馬。伍長統衝鋒，破敵，制勝，奏捷四伍卒。」

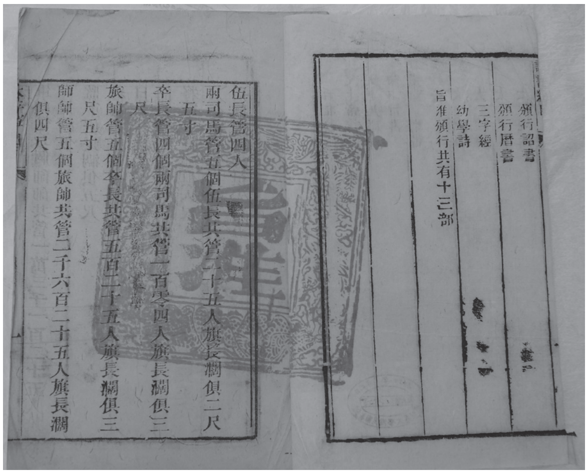

図8　『太平軍目』巻頭

『粤匪南北滋擾紀畧』一巻　清・姚憲之撰　咸豊五年刊（玉里文庫・天の部九一番八三五）（図９・10）

《太平天国大詞典》p980「粤匪南北滋擾紀畧　書名。姚憲之撰，清刻本，二冊。此為姚氏薈萃邸報等編成，記咸豊五年前戰事，及太平軍北伐。系《蠻氛匯編》節本。」日本国内では、本書と同版の咸豊五年刊本が京都大学漢字情報センター、国会図書館、東北大学に所蔵されている。

『金陵癸甲摭談』一巻　清・謝介鶴撰　咸豊六年刊（玉里文庫・天の部九一番八三三）（図11）

日本国内で咸豊六年刊本を有する所蔵機関は鹿児島大学だけが知られている。むしろ、日本人の高見猪之助が訓点を付し、明治二年に刊行した和刻本『金陵癸甲摭談』二巻が日本では広く読まれ、現在でも多くの公私図書館に所蔵が確認される。

『金陵癸甲摭談』は、清・謝介鶴撰『金陵癸甲紀事略』一巻の別本である。

《太平天国大詞典》p935「金陵癸甲紀事略　書名。江蘇常州謝介鶴撰。羅爾綱藏王韜手抄本，謝興堯藏抄本，另有咸豊七年竹籟玕刻本。一巻。《中國近代史資料叢刊・太平天國》據各種版本互校著録。撰者參與張繼庚叛亂，逃出南京後奉命編是書以使清軍知太平軍情況。記事起咸豊三年二月二十七日，迄咸豊四年閏七月二日，內述太平軍攻克南京及城內人口，糧食供應，女館，祭祀儀式，十款天條，曆法，職官，禮制，考試等。」

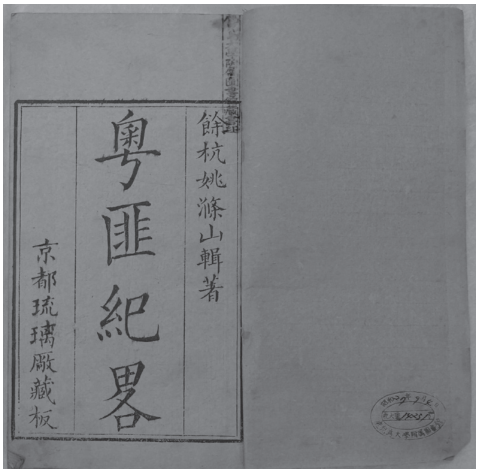

図９　『粤匪南北滋擾紀畧』封面

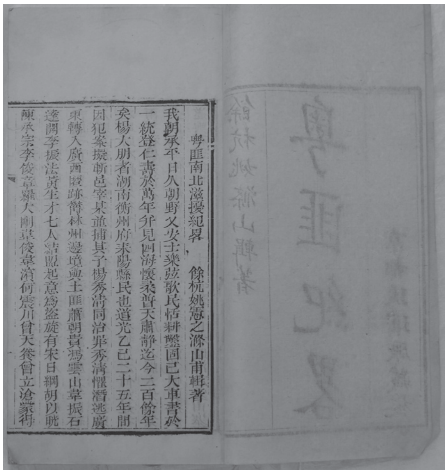
図10　『粤匪南北滋擾紀畧』巻頭

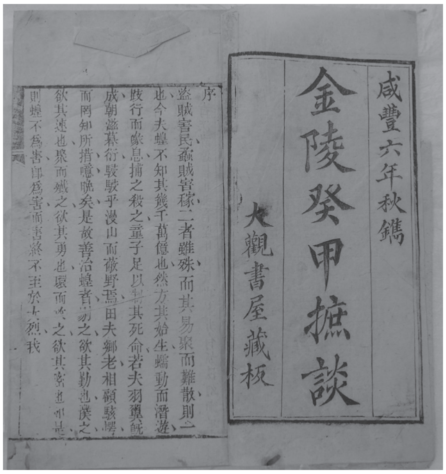

図11　『金陵癸甲摭談』封面

五　太平天国

一八五一年春、中国の広西に勃興し、六四年に南京で滅亡した漢族の反清運動。清朝側は太平天国を長髪賊、粤匪とよんだ[3]。

一八四三年、広東客家出身の読書人洪秀全が拝上帝教（上帝教）を創始する。彼は、中国古代の至上神の上帝を、キリスト教の神と等しい唯一神とした。初めは、広西南東部の、先住民の共同体から排除されていた客家の農民に受容され、その過程で、キリスト教とは異質の土俗的一神教に変質した。一八四八年、楊秀清と蕭朝貴は、上帝とキリストのことばとして、洪秀全がキリストに次ぐ上帝の次男であり、天下万国の真の君主、救世主として地上に遣わされたものであることを告げた。秀全はこれを信じ、地上天国の創立と、秀全が「真の君主」となることを正当化する神話を創造した。客家を中心とする上帝会は一八五〇年春以降、挙兵準備を進めた。夏から秋にかけて、約一万の信徒が、土地・財産を処分して武装集団を結成し、広西南東部の桂平県金田村一帯に集結し、清軍との全面的対決を始めた。翌年春、秀全は天王と称し、「太平天国」を樹立した。

一八五二年五月、太平軍は湖南南部に入り、この地で数万の兵力に拡大し、長江流域を目ざして進撃した。太平軍は厳正な軍規と、強烈な滅清興漢のアピール、また「三年間土地税を免除する」「税を少なくして貧富を均（ひと）しくする」などのスローガンの下に、民衆の強い支持と協力を得、一八五三年三月、二〇万を超える大軍となって南京を占領、ここを首都天京として新政権の建設を開始した。

新政府は旧来の土地制度を承認し、これを基礎に土地税を徴収する政策を採用した。地主勢力は、新政府の地主制容認政策によって生き延び、新政府の地方官の多くは地主や旧胥吏によって占められた。また官と民は身分的上下関係とされて、功臣の官職世襲や繁雑な身分儀礼が規定され、諸王は宮殿を造営するなど、旧来の王朝体制が再現された。この過程で、諸王間の対立が深まり、内部抗争による弱体化に乗じて、曽国藩らの湘軍（湖南の義勇軍）が反撃に転じ、五八年までに湖南、湖北、江西などの太平天国の領域が奪回された。六〇年以降、忠王李秀成の大軍が江浙に進出して反撃するも、一八六〇年の北京条約締結以後、清朝援助政策に転換したイギリスなどの武力干渉、常勝軍（西洋式の中国人傭兵部隊）と湘軍および淮軍（淮南の義勇軍）の攻撃によって追い詰められ、一八六四年太平天国は滅亡した。

六　太平天国印書

「太平天国印書」は、太平天国で印刷された書籍を指す。基本的には、太平天国印刷物の「旨准頒行詔書總目」に示された諸書で、「旨准頒行詔書總目」には一三部、一四部、一五部、二一部、二三部、二四部、二八部、二九部掲載の八種類が知られている。

例えば、『太平天国辛酉拾壹年新暦』（ニューヨーク公共図書館、一九八四年）に基づく。

3　以下の記述は、小島晋治「太平天国」（『日本大百科全書』小学館、一九八四年）に基づく。

館所蔵）の「旨准頒行詔書總目」には以下のように二八部が示されている。

旨准頒行詔書總目
天父上帝言題皇詔
天父下凡詔書　貳部
天命詔旨書
舊遺詔　聖書
新遺詔　聖書
天條書
太平詔書
太平禮制
太平軍目
太平條規
頒行詔書
頒行曆書
三字經
幼學詩
太平救世誥
建天京於金陵論
貶妖穴為罪隸論
詔書蓋璽頒行論
天朝田畝制度
天理要論
天情道理書
御製千字詔
行軍總要
天父詩
欽定制度則例集編
武略書
醒世文
旨准頒行共有貳拾捌部

こうした書目に示されていない太平天国印書も存在し、四〇数種が知られている[4]。

太平天国に対する清朝の厳しい摘発により、太平天国印書のほとんどは欧米に現存しており、中国にはわずかしか残存していない。では、薩摩藩はどのようなルートを通じて太平天国印書を入手したのか。薩英戦争後、薩摩藩は欧米列強の軍事的優位を深く認識し、英国との関係を強める。おそらくこの過程で英国側から薩摩藩に中国における太平天国資料が入った可能性がある。ただしこれはあくまで推測にとどまる。今ひとつのルートは琉球ルートである。薩摩藩の実質的支配下にあった琉球王国は福州に琉球館を置き、中国情報の入手には最適の位置にあった。琉球ルートの可能性も否定はできないのである。

4　王慶成『太平天国的文献和歴史　海外新文献刊布和文献史事研究』（社会科学文献出版社、一九九三年）p3-7に一覧がしめされている。